

高野素十研究

—「踊子」の句の解釈をめぐる—

倉 田 紘 文

(一) 高野素十に次の一句がある。

づか／＼と来て踊子にさ、やける

素十

山本健吉氏はこの句について、『現代俳句』^①の中でこう述べておられる。(解釈に個人の意が加わらないように、全文を掲載する。筆者)

一刷毛の荒々しいデッサンで盆踊り風景の一駒を力強く鮮明に描き出した。ドガのような動きの一瞬を捕えたデッサンである。その動きをとらえただけで、その男女の説明は何一つ不要なのである。何をささやいたかも不要である。だがリズムに乗った踊り場の秩序を乱すある空気の動揺は確に捕えられている。さらに二人の男女の表情も。言わば、フィルムの回転を突然止めた映写幕

の、動きをやめた人物像といった感じである。主情を殺した、作者の目の動きとデッサンの確かさを、この句から受け取ることができる。

概して素十の句は、鑑賞の言葉に窮するものが多い。そこに主情を殺した眼の働きとデッサンの確かさとを読み取ればよい。彼の句はおおむね特異な風景ではなく、誰の目にも触れるありふれた風景だ。だが、誰もほんとうには見なかつた風景なのだ。見ようという意志と忍耐とを持った者のみが見得る風景なのだ。

後記。この句は作者が外遊中の作と言う。ではこの句からわれわれが日本の盆踊り風景を想い描くのは誤りであらうか。私はそうは思わない。作者自身季語として、「踊子」を使っている以上、盆踊りの句として鑑賞されることを期待しているのである。作者が感動を得た実際

の出来事は、ヨーロッパの踊り場風景においてである。だが提出された作品は、そのような事実から移調された世界である。いわんや作者はこの句において、西洋を暗示するようないかなる言葉をも用いていないのだから。鑑賞の対象は飽くまでも作品であつて、背後の事実ではない。作品はその背後の経験よりも、いちだん高い次元に結晶されたものである。写生とは、決して事実を尊重するということではないはずだ。(傍点筆者)

この後記において山本氏は「作者が外遊中の作」「作者が感動を得た実際の出来事は、ヨーロッパの踊り場風景においてである」と断定されておられる。

しかし、この「踊子」の句は、素十がドイツ留学から帰国して二年後、新潟市郊外の村での作品であると思われる。この小論では「踊子」の句に対する山本氏以降の解釈をいくつかあげ、その上で「踊子」の句の鑑賞を試みたいと思う。

(一)

づか／＼と来て踊子にさ、やける

素十

この句に対する諸説を列記してみよう。

(イ) 沢木欣一氏(『近代俳句大観』明治書院、昭和五二年)

農村のどこにでも見られる盆踊り風景で、やぐらを中心に男女が輪を作つて踊る。踊り子はうら若い女性で、

ずかずかと来てささやくのは村の青年である。青年の無遠慮さ、大胆さが「づか／＼と来て」に活写されているのはもちろんであるが、この男女の特殊な親密さを作者は驚きと好感をもつてながめている。山本健吉は「ドカのような動きの一瞬を捕えたデッサン」とし、「彼の句はおほむね特異な風景ではなく、誰の目にも触れるありふれた風景だ。だが、誰も本当には見なかつた風景なのだ。見ようという意志と忍耐とを持つ者のみが見得る風景なのだ」(『現代俳句』)というが、この句などありふれた盆踊り風景でありながら、踊りの雰囲気のおさええている。健吉はこの句を作者外遊中の作としているが、新潟市近郊であらう。同年作に「弁当を負うて祭の群集かな」^②「祭見やこぶの爺のあこにをる」などがある。

(ロ) 鷲谷七菜子氏(『国文学』学燈社、昭和五六年二月号)

この句の持っている雰囲気は今まであげた句とはがらりと変わる。この句から大方が連想するのはドカの踊り子のような光景であらう。この句の踊子は季語で盆踊りの踊り手を指すが、盆踊りの光景というより、舞台の袖で出を待つバレリーナたちを思い浮かべる方がびつたりする。一つのスナップだが、「づか／＼」と捉えた男子の姿より、ささやかれた踊子の張りきつた肢体や目の動きなどの方が明確に浮び上ってくるから不思議である。^③

(ハ) 竹腰幸夫氏(『国文学・解釈と鑑賞』至文堂、昭和五八

年二月号)

へこの句は作者の外遊中の作（山本健吉『現代俳句（上）』）と言われるものだが、そうならば、「踊り子」は当然外国のそれであろう。ところが、素十は、外遊から約二年経て「弁当を負うて祭の群集かな」などの句とともに「ホトトギス」十月号雑詠に発表する時は、「踊り子」を季題とする盆踊りの句としてしまふのである。へこの句から大方が連想するのはドガの踊り子のような光景であろうしへ舞台の袖で出を待つバレリーナたちを思い浮べう方がびたりする（鷺谷七菜子『国文学』）と考えるのが自然である。そしてその方が句としても清新な輝きを持って来るであろう。素十は自ら、そうした輝きを持つ句の世界への展開を、その可能性を放棄したように思える。西洋での実質的写生を、二年後の日本の場に置き換える技は、素十に従えば、丁度「蟻地獄」の場合の（楽の芸術）ということになるのだろうか、そうだとしたら彼の（苦の芸術）の方が、句としては美しさと可能性に満ち、また、より虚子の句の世界にも近いものであったと言えるのではなからうか。

(二) 曾 館山實氏（『俳壇』本阿弥書店、昭和六十年八月号）

踊子よあすは崑の草ぬかん 去来
敷入にもどつて京のをどりかな 許六

かの後家の後ろに踊る弧かな 太砥

満潮に踊の足をあらひけり 鷗外

海の上に月もよすがら盆踊 花菱

づか／＼と来て踊子にさ、やける 素十

古句の方には踊の背後にある季節感が鋭くでているのに、明治に入って新暦を採用してからの踊には、季節の感受が弱まってしまっている。たとえば高野素十の句はドイツ留学中の作であり、ドガの踊りの絵やロートレックの酒場の絵などがすぐに目にかぶほどに、印象鮮烈な一句であるが、この盆踊の句ではないものまでを、作者も、あるいはまた歳時記などの編者が「踊」の項で、盆踊の句と同化せようとすることが、ずいぶん乱暴なことだとは思わないか。

以上(一) (二)の四氏の解釈及び鑑賞は、それぞれ山本氏の、『現代俳句』の説、「外遊中の作」を踏まえてのものであろう。ただ沢木氏だけは「新潟市近郊であろう」と推測され、この句の作られた場所の指定に異なりを見せている。

この作句場所を明らかにすることによって、この句の素材（踊子）を限定することが出来よう。つまり、「ドガの踊り子のような光景（鷺谷・竹腰・館山）なのか、それとも「農村のどこにでも見られる盆踊り風景」（沢木・山本）場所はドイツであるが、一句は盆踊りとして描く）であるのか、である。この句の解釈も、そして鑑賞も、その上でのことであらねばならない。

素十のドイツ留学とその間の俳句作品について述べてみよう。

大正二年四月東京帝国大学医学部に入局して、大正七年十一月に卒業。そして同大学法医学教室に入局、三田定則教授の下で法医学及び血清学を専攻。昭和七年七月、新潟医科大学法医学助教となり、同年十月に文部省よりドイツ留学を命ぜられる。

昭和七年十一月二日、東京発。同四日、神戸港にて上船。十二月九日、ドイツ国ハイデルベルヒ着。

ハイデルベルグ大学血清学教室にてザックス教授、細菌学教室ゴッチリッヒ教授に師事。留学中の論文として

(1) パラチフス腸炎系の病原菌に対する各種鑑別診断用血清の利点について(「免疫研究雑誌」八二卷―一九三四年)

(2) 補体の不活性化について、特に各種の処理による四要素年) について(「免疫研究雑誌」八七卷一―二号―一九三六年)

(3) 蛇毒による補体活性化と補体不活性化の調和について

(同前)

の三つを素十は書いている。⁵⁾

昭和九年十二月十四日、フランス・イギリス・アメリカを経て帰国。昭和十年一月、新潟医科大学法医学部教授となり、翌年二月に医学博士の学位を受ける。

そして、この約二年間の留学期間中に、素十は二四六句を

日本へ送って来ている。その俳句のほとんどが文章の中に挿入されているのであるが、その発表の月と掲載誌などは次の表の如くである。(次頁参照)

(四)

さて、素十の「踊子」の句であるが、この句は昭和十一年十月号の「ホトトギス」虚子選の雑誌巻頭句である。つまり、

草市につきし一荷は鶏頭花 新潟 高野素十

づか／＼と来て踊子にさ、やける 同

夏草に葺きかはりをり鴨番屋 同

弁当を負うて祭の群集かな 同

の四句中の一句である。この号の準巻頭作家は皿井旭川であり、以下、五十嵐播水・山口青郵・富安風生・岡田耿陽・野村泊月・中村汀女・高浜としを・星野立子・池内友次郎・川端茅舎……とつづく。

問題の「踊子」の句は、「新・高野素十」として投稿されている。そして、この句の初出はその前月、つまり昭和十一年九月号の俳誌「まはぎ」に、「近郊のこと」と題した素十の文章中に見ることが出来る。

すいっちょの鳴く葺ある踊かな 素十

踊笠かむりて肩の聳えたり 同

蟬なかす子のあちこちす踊かな 同

蟬がとぶ踊櫓の提灯に 同

計	昭和9年													昭和8年													発表月
	23	1	12	11	10	9	8	7	6	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	4	3	2	1			
	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	照国丸 ハイデルベルヒ ハイデルベルヒ	投稿地名	
	巴里だより其一・其二	ハイデルベルヒⅢ・Ⅳ	ハイデルベルヒⅠ・Ⅱ	ハイデルベルヒ3 てがみ	ハイデルベルヒ2	ハイデルベルヒ1 水竹居様 素十からの手紙	ハイデルベルヒ(五)	ハイデルベルヒより	ハイデルベルヒ1	ハイデルベルヒ(四)	ハイデルベルヒ(三)	ハイデルベルヒ(二)	ハイデルベルヒ(一)	ハイデルベルヒ(一)	ハイデルベルヒ(二)	ハイデルベルヒ(一)	ハイデルベルヒからの手紙	素十消息(一) 素十消息(二)	ハイデルベルヒからの手紙	素十消息(一) 素十消息(二)	素十消息(一) 素十消息(二)	素十消息(一) 素十消息(二)	素十消息(一) 素十消息(二)	掲載文章			
	「ホトトギス」	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	「玉藻」 「玉藻」 「まはぎ」 「玉藻」 「ホトトギス」 「ホトトギス」	掲載誌	
	246	2	37		1	28	10	2	1				34	1			51	32		1	20		26	掲載句数			
	96	5	5	4	5	3	4	5	2	3	5	4	4	4	4	5	5	3	4	5	5	3	4	4	5	ホトトギス誌 雑詠入選句数	

付記1. 「ホトトギス」雑詠96句の中の84句が「文章」に挿入されている句である。

2. ドイツ留学中の懐古作品が2句、昭和11年5月号「ホトトギス」に掲載されている。

たえずとぶ踊櫓の灯取虫 同

真菰もて巻きし手摺や音頭取る 同

づか／＼と来て踊子にさ、やきぬ 同

踊の輪ひろくて人の数さびし 同

この村の早く果てたる踊かな 同

これらの九句の背景が「近郊のこと」に詳しく述べられて
いるので、抄出すると、

この夏は吉右衛門一座が旅興行にきたのであるが、その話は誰か書くといふ話であるから、一つ盆踊を見た話でもしようか。(中略)そこで話は鳥屋野村の盆踊のことになるのであるが、この村には順徳天皇の御遺跡や僧親鸞の遺跡がそこ、にあり、この踊といふものも親鸞上人の教へたものとも、或は順徳天皇のおつきの女官達が大層窮迫されて食を求めた時の踊だとも伝はつてをるさうで、ロツカイ節といふのはどう書くのか、六階とでも書かか七つの踊の手があり、鳥屋野、あねさ、切り込み、弓取り、たまへ、藤の花等のそれ／＼名前がある。盆踊りとしては相当こみ入つたものであり、これ等の踊の名前から何か由緒がありさうな気がする。(中略)見ていて誠にもの静かな、雅びた、寧ろもの足りない位猥雑味のないさびしいものであったが、この新潟といふやうな品のない町のすぐそばにかういふ踊が今に保存されてあつたといふことは誠に珍らしいことと云はねばなるまい。尤も例の僕の側の婆さんの説明によると、この

鳥屋野村も昔は鬼のやうな人達が住んでをって親鸞上人にも順徳天皇にも一向に御奉仕などはせなかつたのであるが、次第に親鸞上人の教化によつて、即ち思想善導によつて今のやうな立派な村人達になつたといふ話であつた。その昔の面影は然し踊を見物に行つた僕達に寄付金を求めて驚かしたことに一寸残つてをるやうである。(後略(傍点筆者))

この文章のあとに、「づか／＼と来て踊子にさ、やきぬ」の句などがつづくのである。つまり、この一文とそこに挿入された句が事実の描写であるなら、「健吉はこの句を作者外遊中の作としているが、新潟市近郊であろう」(『近代俳句大観』)と推測された沢木氏の説が正しいと言えよう。新潟市近郊、即ち一句の場面は「鳥屋野村」の「盆踊」であつたのである。

前項で述べたドイツ留学中の俳句二四六句の中にも、この「踊子」の句はない。もつとも、「ホトトギス」昭和十一年五月号の雑誌

雪を出し額の枝々影をひき 新潟 高野素十

塗蛙に下りて燕のはたはたす 同

ジブシーに占はせをり窓の春 同

春月や畑の蕪盗まれし 同

の「ジブシーに」や「春月や」の句のように、帰朝後に当時

を懐古して発表した句もある。

私がドイツに留学し、ハイデルベルグに居た時なので、四、五十年前の事であろうか。(中略)料理部屋の窓の鉄の格子をへだてて女中のアナが東洋人と見える髪の毛の黒い貧しそうな女と話してをつた。その女は後でアナから聞くと云うのによると、ジブシーの女で手相を占って貰っていたと云うのである。ジブシーは馬車に乗って旅をつづけ、税関などはフリーパスであり、自分達が一夜を明かす畑の物は取り放題であると云う。(「ジブシー」)

しかし、「踊子」の句は、後に発表された素十のどの文章にも見あたらない。

(五)

づか／＼と来て踊子にさ、やける 素十

この句の解釈と鑑賞は、(四)の項に記した沢木氏の、へ農村のどこにでも見られる盆踊り風景で、やぐらを中心に男女が輪を作って踊る。踊り子はうら若い女性で、ずかずかと来てささやくのは村の青年である。青年の無遠慮さ、大胆さが「づか／＼と来て」に活写されているのはもちろんであるが、この男女の特殊な親密さを作者は驚きと好感をもってながめているの通りであろう。そして、それを捉える目は、山本氏の言われる、へ一刷毛の荒々しいテッサンで盆踊り風景の一齣

を力強く鮮明に描き出した。(中略)言わば、フィルムの廻転を突然止めた映写幕の、動きをやめた人物像といった感じである。主情を殺した、作者の目の動きとテッサンの確かさとを、この句から受け取ることができる」ということになろう。そして、さらに私は、この句の「づか／＼と来て」の一語には、素十の「近郊のこと」の文中の、へ尤も例の僕の側の婆さんの説明によると、この鳥屋野村も昔は鬼のやうな人達が住んでをって親鸞上人にも順徳天皇にも一向に御奉仕などはせなかつた×その昔の面影は然し踊を見物に行つた僕達に寄付金を求めて驚かしたことに一寸残つてをるやうである」という印象から、鳥屋野村の村人に本質的に内在する荒々しさをも瞬時に感じ取つての素十の措辞であつたと思ふのである。また、その荒々しさは、下五の原句が「さ、やきぬ」であつたことにも見ることが出来るのである。

〈注〉

①山本健吉『現代俳句上巻』(角川書店、昭和二六年刊)

②沢木欣一『近代俳句大観』(明治書院、昭和五二年刊)。この句の外に二十九句の評釈が掲載されている。

③鷺谷七菜子『国文学』(学燈社、昭和五六年二月号)。これは(俳句の流れを見直す)「ホトトギス」作家の再評価——素十と青畝——として書かれたものである。

④竹腰幸夫『国文学・解釈と鑑賞』(至文堂、昭和五八年二月号)。文中の「蟻地獄」の場合の「へ榮の芸術」……の句

は、「蟻地獄松風を聞くばかりなり」である。

⑤長谷川耕畝「体験的素十論」(「露」昭和五〇年四月号)

⑥俳誌「まはぎ」は新潟県亀田町の佐藤常吉発行であり、主宰は中田みづほである。

⑦高野素十「ジプシー」(「芹」昭和四九年五月号)